
素盞鳴尊

橘川尚文

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

素盞鳴尊

【Nコード】

N8286C

【作者名】

橘川尚文

【あらすじ】

古代。和国建国の父・イザナギの息子、スサノオノミコトは、首府高天原の山奥にひっそりと暮らしていた。ある日、御所の姉・アマテラスを訪ねた彼は、都に漂うただならぬ気配に気付く。

追放篇

昔、青年がいた。名をスサノオという。

スサノオは、国父イザナギの長男である。

が、彼は幼少の頃からどうしようもない放蕩息子であったため、ある日ついにイザナギの逆鱗に触れ、勘当されてしまった。

そのため国政は長女のアマテラスが引き継いでおり、一方のスサノオは山の中に小さな庵を建てて、溪流で釣りをしたり、鳥獣を狩ったり、雨の日は朝から酒を飲み、ごろごろして過ごしている。

スサノオにとっては願ったり叶ったりのことで、スサノオは自分に代わって譲位を受けた姉を妬むどころか、自分と違ってしっかり者のアマテラスならば、無理のない堅実な政で、国をよく富ましていくだろう、と思った。事実その通りになった。

だが、この年は正月から様子がおかしかった。

長雨が続き、春になっても気温が上がらず、それどころかますます寒くなっていく。

「あれれ、また雨が。今年は姉上らしくもない悪天だなあ。何かあったのかなあ」

当時、天候不順とは君主の悪政のために起こるものであった。君主の執政がよくないとき、天が怒り、長雨や日照り、雷を起こして、民百姓を苦しめるのだ。

星が落ちる夜などはその最たるものであり、スサノオは昨夜も二つ、星が閃いて山向こうに消えるのを見ている。

スサノオは狭い庵の中を、そわそわと落ち着きなく歩き回った。

「どうにも心配だ……。よし、明日は久しぶりに姉上に会いに行こう」

スサノオはそう決めると寝酒を呷り、ぐうぐう寝てしまった。

絶え間なく轟いていた雷鳴が突然途絶え、雲が晴れたのは、その

深夜のことである。

翌朝になると、天にはもはや一片の雲もなかった。

「よかつた、今日はいい天気だ」

用意していた雨具を使うこともなく、スサノオは平服に一刀のみを佩びて、山を降りていった。手土産にしようと思い、道中、鮭を一尾釣った。

「病に伏しているのかもしれないなあ。精のつくものを食べてもらわないとだめだ」

それにしてもアマテラスを訪れるのは本当に久しぶりだった。スサノオは姉の喜ぶ顔を思い浮かべながら、足取りも軽やかに宮城へ向かった。

ところが参内したスサノオを出迎えたものは、小銃に銃剣を着け、仰々しく武装した兵士たちであった。

「何事が起きたんだ。ばかに警備がものものしいじゃないか」

スサノオは背後の兵士に向かって訝しげに言った。

「だまれ！」

そのとき、スサノオを怒鳴りつけた者がある。和国軍きつての猛将で、近衛兵司令官のアメノタチカラオである。

アメノタチカラオはホルスターから拳銃を引き抜いて遊底を引き、スサノオに向けた。如何に近衛兵司令官と云えども、ミコトの称号を持ち、三貴士（アマテラス、ツクヨミ、スサノオ）の一人である彼に対してやってよいことではない。

アメノタチカラオは唾を飛ばして怒号した。

「貴様のやったことは何たるザマだ！ 大逆罪だ！」

スサノオにはわけがわからない。

「タチカラオ、人違いするな。わしだ。スサノオだよ」

「そんなことは分かつとる。そのスサノオに言っている！」

タチカラオとのそうしたやり取りは数分も続き、やがてスサノオ

はだんだん腹が立つてきた。もとより気の長い男ではない。

「ええい、もういい！ タチカラオ、貴様如きでは話が分からん。兎に角姉上に会わせる。いますぐだ！」

スサノオは白刃をぎらつと引き抜いて、タチカラオでもたじろぐような大声を発した。

忽ち、兵士たちは色めき立ち、小銃のボルトを一齐に動かしてスサノオを狙った。刀を抜き、アマテラスに会わせると怒鳴るスサノオの姿は、明らかに叛逆者のそれである。だがスサノオには、宮中を固めている近衛軍のほうを、叛逆者と思っている。

こいつらが姉上を、どうにかしてしまったのに違いない。

いまやその一念に取り付かれているスサノオは、恐ろしい形相で兵士たちを睨みまわした。彼らはすっかりスサノオの気に吞まれている。

このときもし、両者の間で戦端が開かれたならば、スサノオは一瞬のうちに彼らを皆殺しにしたであろう。

だが、スサノオと近衛兵の激突は、すんでのところで回避された。

「タチカラオ、何をしています」

屋敷の奥から、アマテラスが姿を見せたのである。

「君！ このような場所へいらしてはいけません、お退がりください」

驚いたタチカラオがアマテラスに言った。アマテラスは眉間を寄せる。

「わきまえなさい、タチカラオ。皆も銃を下ろすのです」

「しかし、君」

アマテラスは女官二人と共に、構わず進み出た。そうして、タチカラオの耳元で、アマテラスはそっと囁く。

「命じた通りになさい。殺されますよ、全員」

「はっ
」

タヂカラオは兵士たちに銃を下ろすよう命じ、自らも兵士たちと一緒に壁際へ引き下がった。アマテラスとスサノオの神格を考えれば、本当なら穴を掘ってそこに入らねばならないほどだ。

「姉上、一体何が起こったのですか。あの仰々しい近衛兵の武備は何事です。……それに、姉上まで」

スサノオは言った。その日スサノオの前に現れたアマテラスは、いつもの華やかな十二単ではなく、カーキ色の野暮ったい軍服姿であった。肩から拳銃を吊り、刀まで提げている。供の二人の女官も、薙刀で武装している。

「スサノオ」

アマテラスは静かに、しかし威厳ある口調で、その小さな口を開いた。

「あなたが、私の毒殺を凶ったという噂が広まっています」

「ばかな！」

スサノオは思わずアマテラスに詰め寄ろうとした。女官が薙刀を両手に構え、スサノオの前に立ちほだかる。

「貴様が正月に送り寄越して来た食物で、君は生死を彷徨われたのだ」

タヂカラオが太い声で言った。

「恐れながら我が君。相手が如何に弟君とはいえど、慶賀と称して不浄の食物を送る輩ですぞ。直ちに検拳致しますゆえ」

するとアマテラスは彼女には珍しく大きな声を出して、タヂカラオを叱り付けた。

「だまりなさいっ！ スサノオをどうするかは私が決めることです。私の言い付けに従えないのですか」

タヂカラオは恐懼して平伏し、その後は何も言わなくなった。

「姉上、そのようなことになっていたとは露知らず、拙者は」

スサノオは言いながら、ぼろぼろ涙をこぼした。拳が震え、取り落とした刀が大きな音を立てる。

アマテラスは女官たちを押し留めて、泣きじゃくるスサノオに近付き、ほかのだれにも聞こえないように小声で、そつと告げた。

「スサノオ、あなたはもうここに居てはいけません。直ちに内裏を出て、高天原を去りなさい。そうして、二度と私の前に現れてはなりません」

「姉上」

「スサノオ、心配は無用です。皆がどんなにあなたを責め立てようとも、私はあなたの性根の温かさを知っています。時折、便りを出しなさい」

スサノオはゆっくりと顔を上げ、アマテラスの白く優しげな顔を見た。母親を知らないスサノオにとって、アマテラスは姉であると同時に、慈悲深い母でもある。そのアマテラスにもう会えないのかと思うと、また止め処もなく涙がこみ上げて来た。

スサノオは最後にアマテラスの身体に触れたく思い、左手を伸ばした。だが、スサノオはすんでのところで、伸ばしたその手のひらを、ぎゅっと固く握り締める。自分は追放されたのだ。もし自分が姉上に触れようとすれば、姉上は自分の伸ばしたその手を、振り払わなければならない。

別れの苦痛に耐えようと、スサノオの顔が大きく歪み、めまぐるしく形を変えた。やがてスサノオは、ついに右手で自らの左手を掴み、強引にそれを引き下ろすと、足早に内裏を後にした。

結局、父様の仰っていた通りになってしまいましたね……。

スサノオの出て行った扉を見ながら、アマテラスは思った。父イザナギの言に背き、スサノオを高天原に住まわせたがための悲劇である。

アマテラスは目を伏せ、踵を返した。水引で束ねた艶やかな黒髪が揺れると、タチカラオや近衛兵たちは銃を置いて、一斉に平伏する。

スサノオは、姉に渡すはずだった生鮭を頭からむしゃむしゃ食べながら庵に戻り、荷物を持ち出すと火を放った。

その足で近くの空軍基地に向かった彼は、制止する警備兵たちを殴り飛ばしながら、手近な戦闘爆撃機の後席に荷物を積み、一人悠然と夕闇の向こうに離陸していった。

その夜、高天原の主流河川のひとつが、雨も降らないのに突然洪水を起こした。人々は、追放されたスサノオの別れの涙で、堰が弾けたのだと噂した。

追放篇（後書き）

この小説は、インターネット小説サイト「駿河南海軍工廠」のブログ「玉川上水」（<http://aquira.blog61.fc2.com/>）上に掲載した同名小説と同一のものです。

八雲篇

高天原を追い出されたスサノオは、暫くは姉アマテラスの顔を見たくないと思い、昇る太陽に背を向けて、それとは反対の方向へ飛んでいった。

そうして出雲国の上空あたりまで来たとき、スサノオは奇妙な形の雲と出会った。その雲は途方もなく巨大で、なお天高く上り詰めようとしている。

形は入道雲とも違い、クスノキの大樹のようだった。天辺で大きく笠が開き、膨らんでいる。

「面白い雲だ。こんな雲は見たことがない」

スサノオは高天原で奪つて来た双発の戦闘爆撃機・アメノハバキリを駆りながら、天に沸き起こる巨雲を見つめ、

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠に

八重垣作る 其の八重垣を

と詠んだ。雲が何重にも重なる出雲の地に、多くの家を建て、妻とともに住みたいという意味で、これは最古の和歌である。

頭上を見上げると、一本の飛行雲がするすると伸びていた。自機の高度を考えると、おそろしく高いところだ。

「なんだあれは。あんな高い場所を飛べるやつがあるのか」

スサノオは感心すると同時に、もし弓矢があれば撃ち落してやりたいと思った。弓矢で届くような距離ではないが、元々鳥を打って生活していた彼である。

やがてスサノオは、機の燃料が尽きたため、眼下の緑々たる草原の上に着陸した。

遠くに山があり、草原の隣を川が流れている。

機を降りて川の水で身を清めていると、上流のほうから箸が一本だけ流れて来た。

「そうか、川上に人が居るのか。ちょうどよかった」

スサノオは顔を手拭いで拭き、川上に向かった。

アメノハバキリの二基の往復動機関は、まだパチパチ音を立てて燻っている。

川のせせらぎを横に聞きながら歩いていくと、一軒のくたびれた水車小屋があった。

その横では、こちらもやはりくたびれた老夫婦が、年甲斐もなくわあわあ声を上げて泣いている。

「お前たちどうしたんだ。何をそんなに泣いている？」

スサノオが訊くと、老爺のアシナツチが

「今年もヤマタノオロチがやって来る時期になったので、それで泣いているのです」

と答え、言い終えるとまたすぐに泣き出してしまった。二人があまり激しく泣くので、事情をまったく知らないスサノオまで、可哀想で涙が滲んで来た。

「ばか、泣いてばかりいても分からんじゃないか。そのオロチというのは何のことだ」

すると、今度は老婆のテナツチが答えた。

「オロチは、おそろしい化け物です。毎年村から一人、若い娘を生贄に出さなければ、その村は滅ぼされてしまいます。今年はついにクシナダの番になったので、悲しくて泣いています」

「クシナダというのは、そなたらの娘か」

「はい。八人いた娘のうち、残った最後の子でございます」

なるほど、とスサノオは思った。高天原では生贄という文化は既に廃れて久しいが、一步その支配の及ばぬところへ出れば、まだまだこつした旧弊が色濃く残っているのだ。

もしかしたら姉上がわしを送り出したのは、こうした辺境の騒乱を、わしに治めさせるためかもしれぬなあ……。

スサノオは、決心した。

「よし、アシナツチ、テナツチ。もうよい、泣くのをやめよ。わし
がそのオロチとやらを懲らしめてやる」

二人はしゃくり上げながら、顔を上げた。

「本当でございますか」

「ああ、本当だとも。その代わり、そなたらの娘をわしの妻にくれ」

アシナツチとテナツチは、驚いて顔を見合わせた。

「あなた様のような尊いお方に、私どもの娘を？」

スサノオは大きく頷いた。

「うん。わしはこの出雲の地で妻を娶り、宮を建てて暮らすことに
決めたのだ。こうして巡り合わせたのも縁というものだと思う」

二人の夫婦神は感動してスサノオに抱きつき、またわあわあ泣き
始めた。スサノオも、二人と一緒に大声を上げて泣いた。

一方、そうした事情を知らないクシナダヒメは、小屋の中で縫い
物をしていた。

「あなたが、スサノオノミコト様？」

クシナダは、大きな目をぱちぱちさせて、スサノオを見ている。

クシナダもスサノオの高名は耳にしているが、そのスサノオが何故
こんなところに来ているのか分からない。

「そうだ。わしがオロチを退治して、そなたを妻にする」

スサノオが言うと、クシナダは不安そうに小首を曲げた。

「そうですか。けれど、大丈夫かしら」

「どういう意味だ」

スサノオはむっとした顔付きで、クシナダを見る。

「これまでも、他の村の人が生贄を差し出すのを拒んで、和国の空

軍にオロチ退治をお願いしたことがございますの」

「そうなのか。それで、どうなった」

クシナダは、針で着物を縫い合わせながら答えた。

「追い付けませぬ」

「なんだと？」

「オロチは雲よりも何よりも、高い高あいところを、それはそれは凄まじい速さで飛びますの。ですから、和軍の飛行機などではとても」

「撃ち落せないのか」

クシナダは小さく頷いた。

「まず、無理ですわ」

スサノオは、今朝のあの飛行雲のことを思い出した。もしあれがオロチだとすれば、なるほど一筋縄でいく相手ではない。

「それに、和軍がオロチを退治していたのなら、私が生贄になるよ
うなこともありませんでしょう？」

「そりゃ、そうだ」

それにこのクシナダという姫も、なかなか容易な少女ではない。

クシナダはスサノオの顔をまっすぐ見つめながら、言った。

「いつたい、あなた様にオロチを退治できましようか」

「分かん」

クシナダに訊かれて、スサノオは、きっぱりと答えた。こればかりは、戦ってみなければなんとも言えない。

クシナダは目を丸くして、スサノオを見ている。

「まあ……。オロチを退治して、私をお嫁様になさるのではありませんの
せんの」

「いや、そなたのことは必ず嫁にする」

「それでは、オロチのほうも何とかごまかして、やっつけませんと」

「うん」

スサノオは、早くも尻に敷かれつつあった。

翌朝、村中の家から少しずつ酒を徴発したスサノオは、それをア
メノハバキリに給油して、発動機を回した。

「ビィ、と風を巻いて翅が回る。その隣では、男が愛馬に草を食
ませていた。」

「だんな。だんなの馬は、随分と速そうですねえ」

「なんだ？ よく聞こえん」

男が話しかけてきたが、発動機の爆音がうるさく、スサノオは訊
き返した。

「だんなの馬は、足が速そうだって言ったんですよ」
するとスサノオは豪快に笑って、

「お前の栗毛も、捨てたものではなさそうだ」
と応じた。

「ミコト様」

反対の側から、今度はクシナダヒメが声をかけた。

「どうです、具合は」

スサノオは発動機の回転数を上げてみた。音が高く、大きくなる。

「実にいい。これから飛んでみる」

するとクシナダは、後席の風防を開け、足場に足をかけた。

「おい、どうする気だ」

スサノオは後ろを振り返って、クシナダに言った。クシナダは身
のこなしも軽く後席に飛び乗り、顔だけを出して答える。

「私も参ります。御供させてくださいまし」

「だめだ。何かあるとも分からん。そなたは家にもどれ」

クシナダは風でなびく髪を手で押さえながら言った。

「ミコト様ご存知？ この型の砲は、後ろにいて弾をこめる仁がい
なければ撃てませんのよ。それに、もしミコト様に何かあれば、私
はオロチに食べられるのですから同じことです」

「それはそうだが……。わしはオロチなど放っておいて、そなたを乗せて逃げるやもしれぬぞ」

すると、クシナダは声を上げて笑った。

「そのときは、私は自害して果てます。さあさ、これ以上の問答は無用。出発いたしましょう」

「仕方がないな」

スサノオは車輪止めの岩を馬主の男に払ってもらい、風防を閉めて離陸した。

スサノオは村の上空を二度、大きく旋回すると、そこから南に向かつて針路を取った。

「何やら機械がいつぱいですわ」

後席でクシナダが言った。

スサノオが教えた通りに行っていれば航空図を描いているはずだが、操縦席からは様子がよく分からない。

「後ろに乗ったからには、そなたにははっきり覚えてもらわなくては困るな」

「私に出来ますかしら」

自分から乗ったくせに、そんなことを言っている。

「大丈夫、わしは一晩で覚えた。そなたもそうしろ」

「はい」

クシナダは面相筆に墨をつけながら答えた。

そうやってしばらく飛んでいくと、青空の真ん中に黒点が現れた。

見つけたのはクシナダのほうが早い。

「何かしら」

「どうした？」

「ソラマメが空を飛んでいます」

スサノオは周囲を見回した。特に何も見えない。

「見えないぞ。方位は
「西」

即ち西である。いまは南に向かって飛んでいるから、右手の方向だ。

スサノオもそれを認めた。確かに黒い豆粒が飛んでいる。同高度。

「あれがオロチかな」

「さあ、よく見えませぬ」

「近付いてみよう」

スサノオは操縦桿を傾けて、豆粒に近付いていった。肉眼でも形を確認出来るようになった。ゴツゴツした無骨な形を持ち、四基の発動機が轟々と音を立てている。

「どうだ？」

スサノオが訊く。クシナダは首を振った。

「オロチではありません。けれど、オロチの仲間ですわ。やっつけましょう」

ふむ、とスサノオはすこし考えた。

「あれは、オロチのなんなんだ？」

「揮発油給油機です。ここで給油をしてから来るのだとか。和軍の兵隊から聞きました」

「そうか」

スサノオはそろそろと給油機に接近していった。相手はさかんに発光信号を打って来る。スサノオには読めないが、おそらく「味方か？」とでも訊いているのだろう。

スサノオは返事代わりに、いきなり20ミリ機関砲で相手の空中線を吹き飛ばし、次に旋回式の銃塔に狙いを定めて、同じように潰した。

それを合図にして、相手は猛然と打ちまくってきたが、既に銃塔が一基潰れているので、その死角を縫って、スサノオは次々と銃塔を撃ち抜き、無力化していった。

ついに全部の機銃座を破壊したスサノオは、機を相手機の操縦席の真横に近付け、指で「北へ行け」と合図した。

相手操縦士たちが戸惑っていると、クシナダが13ミリ旋回機銃を取り出し、相手機の頭上に威嚇射撃した。相手は仕方なく、スサノオの言うとおりに機首を北に向けた。

「よし、お前たちの仕事は終わったぞ。どこへでも行け」

給油機を元の草原に強制的に着陸させたスサノオは、高天原から持ってきた稲の苗を相手機の搭乗員たちに渡し、肩を竦めて去っていく彼らを見送った。

「こんなもの何に使いますの」

クシナダは、鶉鼠色の給油機をぐるりと見て回って、スサノオに訊いた。速度は出ないし、動きも鈍い。なにより銃塔は全部スサノオが壊してしまっている。

スサノオは腕を組んで給油機を見ている。如何にも頑丈そうなくりで、スサノオはこれはこれで、嫌いな形ではない。

「オロチに冷や汗をかかせてやる。アシナツチとテナツチを呼んでくれ」

クシナダは頷いて、家のほうへ向かった。

八雲篇（後書き）

この小説は、インターネット小説サイト「駿河南海軍工廠」のブログ「玉川上水」(<http://aquira.blog61.fc2.com/>)上に掲載した同名小説と同一のものです。

その日、朝酒を飲んでいびきを掻いていたスサノオは、突然、二度寝の楽しみを打ち切って、目を覚ました。

表へ飛び出して、額に手をかざし、空を見上げる。

「どうなさいましたの」

小屋の隣で洗濯物を干していたクシナダが、振り返って言った。

「ヒメよ、どうやら奴が来たぞ。オロチが」

「えっ」

クシナダは、スサノオの見ている方向の空を、同じように見た。しかし何も見えない。

「どこです」

クシナダが訊くと、スサノオは

「ばかだな、まだ見えるわけがないよ」

と答えた。確かに見えていたらもう手遅れだ。

「でしたら、なぜ来たと分かるんですの」

「それは……」

スサノオは言葉に詰まった。こういう感覚を当たり前に持って、独りで生きてきたスサノオだから、それを他人に説明するということがこれまでにない。

「強いて言うならば勘、のようなものだ」

「まあ」

クシナダは笑った。

「そんな不確かなことでは困ります。いないかもしれせんわ」

「そのときは、引き返せばいいじゃないか」

「ですけど、お酒だつてタダではありませんのよ。それに勘だなんて……。ああおかしい」

「うるさいな、笑わば笑え。わしは大昔から、そうやって獲物を取

つてきたのだ。文句があるか」

「ありませんとも」

そのとき、このあいだの馬主の男が、馬を曳いて通りかかった。

「へーえ。だんなたち、仲がおよろしいですねえ。もしかして夫婦ですかい」

「いや、まだだ」

とスサノオが言うより早く、クシナダが

「そうですわ」

と言ってしまった。

「こら、不躰な」

スサノオは叱ったが、不躰の見本のような彼がそう言ったところで、何の説得力もない。

ともあれスサノオは、この日も自らの勤に忠実だった。アメノハバキリの後席にクシナダを乗せた彼は、急ぎ草原を飛び立つ。

先日の四発給油機は、既にアシナヅチとテナヅチが操って、アメノハバキリに先行している。

そのオロチに給油する燃料槽には、スサノオが小便を満たしておいた。

「うまくゆきますかしら」

無線機の数字盤を動かしながら、クシナダが言った。

「うまくいかなければ、それまでだ」

あのとに見た飛行雲がオロチだとすれば、あんな高さまでアメノハバキリは到底届かない。

まともに張り合うには噴進機か前翼型が必要だが、それはまだ高天原でも数機の試作機があるのみで、その高天原の応援も期待できない以上、搦め手で何とかするしかなかった。

「ミコト様は、心配ではありませんの？」

「心配か。心配はそなたに任せてある。それよりアシナヅチとテナ

ツチから何か連絡はないか」

クシナダは、またゴリゴリ数字盤を動かした。

「いえ、まだ何も。……あ、ミコト様、待ってください。どうやら無事オロチと接触したそうです」

「そうか。よし、アシナツチに相手はどんなやつか訊いてみる」
すると、クシナダは口を尖らして言った。

「いけません。こちらが発した声はオロチにも聞こえるのですよ。オロチを倒そうという私たちが、給油機と話しているなんて、おかしいじゃありませんか」

「ふむ、そうか。それもそうだな」

図らずも、クシナダと生死を共にすることによって、スサノオの熱い勇に、クシナダの冷静な智が備わる形となっている。

アシナツチとテナツチも、そういう事情を心得ており、何気ない給油作業の様子をさかんに電波に乗せて、クシナダに克明に伝えてくる。

「大丈夫、順調に進んでいるようですね。不審がられている様子もございません」

「よし、どうやらうまくいったか」

やがて、オロチが給油機を離れた旨の通信が入った。スサノオは高度を上げ、村の手前50里の空域で敵を待ち伏せた。

スサノオは暫くその場を大きく旋回していたが、30分もするととうとう逆探が敵の電探波を感知した。

「ミコト様。逆探に反応」

「来たな。その敵の電探はこっちを追尾しているか？」

「いえ、まだ入感が周期的です。……あ、いま捕捉されました」

「方向探知機の針はどうだ」

電波の照射元を特定する機械である。これと逆探を組み合わせることで、敵の位置を知ることが出来る。

「動いていますわ。指針は午^{ウマ}」

「真南か。よし」

スサノオは操縦桿を傾けて、ゆるやかに南へ旋回した。

「ヒメ、敵の電探波を攪乱してみる。位置を欺瞞するんだ」

「無駄です。出力が桁違いですもの」

クシナダの掌は、じっとり汗ばんでいる。想像を絶する強烈な電探照射だ。使い方によっては焼き豚でも何でも作れるだろう。

「どうやらミコト様のお勘は、当たりを引いたようですわ」

スサノオとクシナダは、上下左右を隈なく見張った。方向探知機は敵の方角は教えてくれるが、その位置や高度は分からない。最終的な接敵は目視に頼らざるを得ないのだ。

どこだ、お前はどこにいる。天下のスサノオが、はるばるお前のためにやって来たのだぞ。もう一度、俺の前に姿を現してくれ……。

「あっ！」

そのとき、双眼鏡を手にしたクシナダが、腕を伸ばして上空をまっすぐ指差した。

「見つけた！ 左上空に飛行雲！」

スサノオも、それを見た。

目指す獲物はあの時と同じように、蒼穹の中に白い雲を一本、長く伸ばして、ゆっくり飛行していた。

「高いですね……。あんなところまで上るのは骨ですわ」

相手がただ飛ぶだけの物体ならば、それは幻想的な光景だった。

だがその正体は、自らにまつるわぬ者を炎によって焼き滅ぼす、不遜の龍である。幻ではない。

「だが、かなり高度が落ちている」

スサノオはオロチを見上げながら言った。あの時はそれが曳く白線しか見えなかったが、今日はおぼろげながら、そのシルエットも

見える。アメノハバキリの飛べる限界高度ぎりぎりといったところか。

「ヒメ、」

スサノオは身をよじって、後席のクシナダを見た。クシナダも、スサノオを見ている。

「わしと一緒に命を賭けてくれ」

するとクシナダは唇を引き結び、そして大きく頷いた。

それを合図に、スサノオは両翼に懸架した噴進式推力補助機関を点火する。光芒が空中に白く閃き、次いで奔流となってそれが噴き出した。

白煙が青空に長く尾を引き、それがアメノハバキリを天高く押し出していく。

「こいつ……。なんてやつだ」

スサノオは近づくにつれて、相手の大きさが徐々に分かってきた。高空の強い光を受けて銀色に輝くその身体は、まるで八つの谷、八つの峰にまたがるほどに大きい。

「まるで城ですわ」

クシナダが言った。確かに城である。六基の巨大な発動機を後ろ向きに積み、不動の威容を保ちながら轟然と飛んでいる。

加えて、恐ろしく速い。本来の性能を保っていたなら、アメノハバキリなどはとくに引き離しているはずだ。

「追い付きますか」

「なんとかやってみる」

スサノオは燃料の尽きた推力補助機関を切り離し、混合気流入弁を最大に開いた。それでも距離の縮まり方は、じりじりするほど小さい。

「こりゃ、ウロウロしていらんな」

相対速度が小さいということは、敵の旋回機銃の狙いもよくなるということだ。そうなれば被弾時の脆弱性が劣るこちらが著しく不利だった。返り討ちにされる危険が高い。

そのとき相手と自機の様子を見て、クシナダが口を開いた。

「ミコト様、お待ちください。暫くこのままの距離を保って進みましょつ」

「どういうことだ」

「このまま突っかけても、恐らくこちらが蜂の巣になるだけですわ。攻撃をかける気なら、まもなく敵は爆弾倉の扉を開くはずですよ。そうすれば速度が落ちますから、そのとき一気に」

「肉薄して叩き落すか」

「そうです」

「分かった」

スサノオは速度を少しだけ落とし、敵の銃塔の射程外ぎりぎりのところを並進して飛んでいった。

「こいつは、一体どこから来たのかな」

連れ立って飛んでいる敵の横顔を見ながら、スサノオはふとそんなことを思った。オロチの六基の発動機の音は、離れていても、こちらのそれよりも大きく聞こえるようだ。

「さあ……。海に向こうの、遠い遠い龍の国でございましょうね。

海は海の国、風は風の国より参るもの」

「なるほど龍の国か。このオロチが、群をなしておるのだな」

「お止してくださいませ、左様な話。私は気味が悪うございます」

「そうかな。わしは、いつか行ってみたいという気がする」

「どうぞ、お独りで行ってらっしゃいませ」

そのとき、敵が機首をちよつとだけ、上げた。スサノオはおやと思ひ、オロチがこちらの会話に反応を示したというように感じた。しかし、敵が爆弾倉の扉を開いたため、爆撃行程に入ったのだということが分かった。

「開いたぞ」

「いませす！」

スサノオはわずかに頷き、操縦桿を思い切りよく倒した。両翼がぐらと翻り、陽光が閃く。

沈黙を続けていた敵の銃塔が、一斉に撃ち掛けてきた。火点は胴体の上下に合計十六門。連装機銃塔が四基ずつ。

スサノオは素早く敵の上方に出、下部機銃塔の死角に入った。これで敵の向けられる機銃は半分の八門になる。が、それでもまだ多い。

アメノハバキリは、狂気の如く撃ちまくってくる弾幕の中を、真っ直ぐ突っ込んでいった。……ように見えるが、実際にはスサノオは機をわずかに横滑りさせて、敵の照準を紙一重のところを外している。

スサノオは37ミリ砲を撃ち、次いで20ミリ機関砲を山のように浴びせて、敵の銃撃の合間を縫い、下方へ抜けた。

敵はみじろぎもしない。

「化け物め！」

スサノオは笑った。

「無闇に撃つたところで効き目はなさそうですわね」

37ミリ砲の弾をこめたクシナダは、改めてオロチを見上げた。相当数の弾を当てたはずだが、全然効いていない。

「弾を当てていればいつかは落ちるだろう？ やつも不死身ではないはずだ」

「ですが、その前にこっちがお陀仏ですわ。弱点に絞って攻撃しませんと」

「弱点というとなんだ」

クシナダはオロチの巨大なシルエットを見ながら、ちょっと首をひねって考えた。

「まず、あの垂直尾翼ですわ。とても大きいでしょう？」

「うん」

「大きいのも理由があります。オロチは図体がでかいですから、安定性を得るために、垂直尾翼を大きく取らねばならないのです。

ですから、あれを壊せば一発で落ちます」

このあいだ、敵給油機の銃塔を狙い撃ちにしていったスサノオにとつてみれば、造作もない話だ。

「更に、あれだけの大きな尾翼。恐らく真後ろを撃てるのは尾部の一基の銃座だけです。まずはあれを潰して、それから垂直尾翼を撃ちましょう」

スサノオは目をしばたいた。

「そんな簡単なことでもいいのか？」

「私、小難しいことは嫌いですもの」

スサノオは機を旋回させ、オロチの後ろにつけた。両者の距離は徐々に狭まっていく。オロチの巨大な機影は、とつくに照準器から大きくはみ出ていた。

「おかしいな」

「どうなさいましたの？」

「一発も撃つてこないんだ」

敵の射程には既に入っている。先刻とは打って変わった奇妙な静寂が、二機の間流れていた。

するとその直後、敵機の尾部に赤い光が灯った。その光はアメノハバキリの右翼に真っ直ぐ伸び、正確に追尾している。

「まずい！」

スサノオは翼を翻して鋭く上昇した。直後、甲高く大きな破裂音が巻き起こり、スサノオの操縦席を掠めて、白い光の線が遙か後方にすっ飛んでいった。それは遠くの山間に着弾し、爆煙を吹き上げる。

「なんですか、あれは……」

クシナダは一瞬の緊張がまだ解けず、胸が高鳴っている。

「電磁加速砲の本物だ。あれが相手じゃ後ろからやるのは無理だ」

防備が一番薄くなるところに、一番強力な火器を配置したということだろう。そのようなやり方は高天原でもある。……もつとも、威力は桁外れだ。

「どうする？ このままじゃ爆撃されちまう」

「いま考えてます」

クシナダは、うらめしげにオロチの巨体を見た。いい加減クシナダには、我関せずと飛び続けるオロチのことが、忌々しくなっている。

「では、ミコト様。こう致しましょう。まず敵の正面に回ります」

「正面だと？ おい、反航戦を挑む気がよ」

スサノオは驚いた。反航戦では、相手にとってこちらは静止目標となる。しかも真正面は多くの火器で武装され、機銃の数も一番多い。

「ですが、それが一番手っ取り早いやり方ですわ。正面攻撃なら相手の速度のおかげで弾の威力が増えますし、致命傷となる箇所も多くなります」

「だが……相打ちになるぞ。それでもよいのか」

後席を振り返って、スサノオは言った。スサノオは死を恐れないが、いまはクシナダを後ろに乗せている。

クシナダは、スサノオを真っ直ぐに見つめ返して、首を横に振った。

「いいえ。相打ちなどにはなりません」

「どうしてだ」

スサノオがわけを訊くと、クシナダは躊躇せず答えた。

「あなたが、スサノオノミコトだからですわ」

そうか。

それで、スサノオは決心がついた。

自分はアマテラスから高天原を追われることによって、この出雲の地へ降り立った。もしそのことに理由があるならば、それはかのオロチを鎮めることに相違ない。

ならば、わしにはオロチを鎮めるという天命が、生来具備されていることになる。しかし……。

心配なのはクシナダのほうである。

「わかった。ただしそなたは頭を低くして、小さくなっておれ。弾の当たらんように」

「心得ました」

そう言うときクシナダは、自らの身体を櫛に変えて、スサノオの頭の上に乗った。

「おいおいヒメ」

スサノオは機を旋回させながら、苦笑する。

「ここなら、弾が当たりっこないですわ」

「そりゃ、そうだが。まあ、しつかり掴まっているんだな」

スサノオはその櫛を深く髪に差した。機はオロチと向き合う場所まで来ている。

「これで向かい合った。よし、戦闘機で一騎討ちだ。二人乗りだがな」

「相手は十何人も乗っていますから平気です」

オロチの巨体が眼前で大きく膨らむ。スサノオが狙いをつけると、オロチは前に向けられる機銃を全部動員して、嵐のように弾を見舞ってきた。しかし当たらない。スサノオとクシナダは、いま太陽を背にしているのだ。

姉上、ご助力ありがとうございます。

スサノオは彼方のアマテラスに向けて、胸中で念じた。昼の太陽はその名の通り、アマテラスのものである。

オロチとの距離が更に縮まる。スサノオは20ミリ機関砲を使って、操縦席を撃った。20ミリ弾を立て続けに受けて、操縦席の前面風防が朱に染まり、そして吹き飛ぶ。

次いでスサノオは37ミリ砲を敵主翼の付け根に命中させ、そのまま下へ抜けた。大きく旋回して見上げていると、突如敵機の長大な主翼がへし折れて、凧のように飛んでいった。自らの主翼が生んだ巨大な揚力が、自らの身体を引き裂いたのである。

片翼を失ったオロチは、大きくバランスを崩し、くるくる回転しながら地上に落ちていった。

「……ほかのものは跡形もなく燃えちまっただけが、これだけは綺麗に残っておりましたよ」

それから数日後。あの馬主の男がスサノオのところへやってきて、一個の大きな機械を差し出した。

二本の軌道が突き出た細長い機械で、それは一見がらくたのようだが、実際はそうではない。

「驚いたな、残っていたのか」

スサノオは模型でならば見たことがある。オロチが尾部に搭載していた電磁加速砲である。

「だんな、こいつをどう致します？ 闇で売りに出せばみんな大騒ぎしますぜ」

男はそう言ったが、スサノオは首を振った。

「そのような考えは、ばかなことだ。わしはこれを姉上に献上しようと思う」

「献上？」

男は目を丸くして、スサノオと件の代物を交互に見た。

「そんなことでいいんですかい？ まったく、だんなは欲がなくていけねえですよ。人が良いんだか悪いんだか、分かりやしねえ」

「人の世の中とは、そのようなものだと思う」

そのとき、水車小屋の中からクシナダが顔だけ覗かせて言った。

「あなた、いつまで悪巧みの相談をなさっていますの。洗い物が片付かないじゃありませんか。早く召し上がってくださいまし」

「ああ、分かった」

スサノオはそう答えると、もう一度男に向き直った。

「そういうことだから。とりあえず、これは有り難く頂戴しておく」

「ちえつ。そんならわざわざ持つてくることあなかつたな」

男は不満そうに石を蹴った。

「まあ、そう言うな。その代わりといってもなんだが、お前に銘を彫ってもらいたい」

「銘？ 高天原に献上する品にですか」

「お前が見つけてきたのだからな。……よし」

スサノオは懐から木簡を取り出し、渋るクシナダに墨と筆を持ってこさせた。

天叢雲剣。

そうして、そのように書いて男に手渡した。

男はそれを持って、元の通り馬に荷車を曳かせ、帰っていく。

その後姿を見送って、それから、二人はどちらからともなく顔を見合わせた。

巷には、暖かな夏風が吹いている。

クシナダは、ふつと柔らかに微笑み、スサノオの手を掴むと、家のほうへくると向きを変えた。

「さてと、ごはんごはん」

「ああ、ああ」

空は、夢のように青い。

穴だらけになったアメノハバキリが、草原の上で翼を休めている。

その休めている翼に、また蜻蛉が止まり、その上で彼もまた翅を休めた。

屠龍篇（後書き）

この小説は、インターネット小説サイト「駿河南海軍工廠」のブログ「玉川上水」（<http://aquira.blog61.fc2.com/>）上に掲載した同名小説と同一のものです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8286c/>

素盞鳴尊

2008年11月7日09時08分発行